

平成30年度岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議第2回会議

議事概要

日 時 平成31年3月18日（月）

13:30～15:30

場 所 岡山県庁分庁舎6階共用会議室601

1 開 会

2 議 事

(1) 協議事項

「社会教育施設を活用した学び直し」について

3 その他

(1) 平成31年度の主な事業案について

(2) 第42回中国・四国地区社会教育研究大会岡山大会

4 閉 会

<議事概要>

○「2議事（1）協議事項『社会教育施設を活用した学び直し』について」

関係資料により事務局が説明

会長

今の説明の論点をまとめると3点あると思う。1点目は、前回は、研究の対象を現役世代と広く捉えた。それを子育て世代の親の学びに絞ること。2点目は、地域とのつながりを考える上でなぜ社会教育施設なのか、社会教育施設だけでなく多様な団体も含め幅広く捉えていくこと。3点目は、そのように整理しても、やはり気になるのは、厳しい家庭環境の子どもや、貧困、格差の問題で、社会教育施設の取組を発展させても来られない親があること。また、気になるのは、どの親でも、家庭教育の学習について学んでみたいことを質問すると、特にないという答えが多いこと。この取組を進めるほど、逆に厳しい家庭環境の子どもとの差がさらに開いていくのではないかという懸念もある。こうした3点について特に意見をいただきたい。皆様の意見を伺いながら進めていきたい。自由に発言いただきたい。

- 委員 生涯学習審議会・社会教育委員の会議は研究をしていく会議なのか。
- 会長 社会教育委員の会議の役割には調査研究もある。中長期的な視野に立って、岡山県の教育課題について検討し、今後の岡山県の社会教育、生涯学習の推進に寄与すること。ここでの検討や課題を踏まえて、岡山県の施策に反映させていくということなので、そのための調査研究は大切や役割だと思う。今までも、2年に1回、社会教育委員の会議の中でテーマを絞りながら、我々の中で取組むことを調査研究して進めてきた。今回の生涯学習審議会・社会教育委員の会議では、子育て世代の学びについて、調査研究を進めてはどうかという提案だ。研究をしながら、事務局と一緒にまとめていきたい。
- 委員 前回、現役世代という言葉が広いという意見があったので、それを子育て世代を対象を絞ったが、子育て世代の困難な状況をテーマにして、どのように議論していくか。
- 委員 問題意識が共有されないと、この会議の進め方は難しい。例えば、去年、岡山県の校内暴力行為が1,219件、認知されたいじめ発生件数は2,866件あった。そういった問題が起きている時にまわりの子どもがどうしているかという、一番多いのは見て見ぬ振り、2番目がいじめる側に荷担する、3番目が逃げる、である。今の子どもたちを見ると、子どもの頃からの教育が不足し家庭の中でつけられるべき基本のことが置き去りにされているのではないかと感じている。そういったことに対し、この生涯学習審議会・社会教育委員の会議で解決するプロセスがでたらいいのではと思っているが、問題意識を共有する必要がある。なぜ子育て世代の学び直しをしなければならないか共有されていないのではないかと思う。
- 会長 子どもに直接的に取組を行うのは学校教育の役割だと思う。社会教育は、学校外、あるいは生涯学習では子ども、大人、高齢者も対象となり、直接的に、先程お話のあった子どもに対する働き掛けは難しいかもしれないが、家庭や地域が連携することによって、そういった課題を解決していこうということが大切である。社会教育、生涯学習は強制させることはできない。しかし、放っておいたら、ますます格差が広がるのではないか。では、どのような支援ができるのかということについて、皆さんと議論しながら、岡山県の施策に貢献できるようなことを取組めたらと考えている。
- 委員 前回は、社会教育施設があまり上手く使われていないからもっと有効に使ったらいいのではないかというテーマかと思ったが、それに限定しないということか。そして、様々な問題に対してNPO等の団体や公的な機関が取組んでい

ることを、もっとうまく連携して、住民がそれを利用しやすくできるように何かできたらいいのか。したがって、この会の目的として、県教委として、学校教育以外に、社会教育、生涯学習として、どのようなことをした方がいいか研究するということか。

委員 生涯教育とは、人生100年時代に、いつまでも勉強するというイメージで最初は受け取ったが、この場では、生涯教育は、子育てに悩んでいる人たちが自分の悩みを解決できる力を付けるために、どのような勉強をしたらいいか、どのような支援をするかということに絞ろうということか。

会長 生涯教育は、高齢者や大人の学びではない。学校教育、家庭教育、社会教育も含めて生涯教育である。

委員 大学を卒業したら教育が終わりという観念ことではなく、長い人生常に勉強する必要がある、ということが今、言われているわけだが、それでは焦点がぼやけるので、やはり、子育てに悩んでいる人々の力になれるような、問題に絞って検討しようということだと思う。その場合に、悩んでいる子育て世代が一番解決してほしいことは、やはり、学力やしつけ等、もっといい子に育ててほしいということが原点だと思うので、親を悩ませる子どもを良くするということが切り離して考えられない。例えば、岡山市の公民館では、夕方子どもを預かり、勉強や、社会性が身に付くような環境を作っており、また放送大学のサークルで、仕事の技術を生かし、子どもの理科離れを支援するために小学校で授業を行い、学力向上にも貢献している人もいる。つまりこのような活動に関わっている人は、仕事を引退した世代が中心となり、自分達が蓄積したことを子どもたちに教え、それを通して、教えている世代と子どもたちの間にある子育て世代を助けている仕組がある。そういったことが焦点になってくるのでは。悩んでいる親が、子どもをもっとよく教えられるという方法を聞いたからといって、すぐできるわけではないと思う。むしろ、実際に親が悩んでいる子どもを改善するような具体的な何かがある方が助かるのでは。

会長 そういった取組に関われる人はますます利用していると思う。ただ、今説明のあった資料を見ると、ますます豊かになる家庭と厳しい家庭との格差が広がるのではと思う。既存の取組に参加している家庭は限られているのではないか。その取組を進めるだけでは、かえって格差を広げるのではないか。

委員 格差を拡大させるかもしれないやり方ではない方法を考えるか。

会長 資料にあるように、子育て世代の学びについて、やはり厳しい家庭に焦点を

あてるとか、やはり全世帯の学びを考えていってさらに厳しい家庭により焦点化するとか、案があると思う。

委員 厳しい家庭環境の親を助ける、というのは生涯教育というのは少し違ってくるのではないか。

会長 関心がないのはネグレクトになるが、関心があっても、仕事等が忙しく、子どもに関われない家庭もある。様々な家庭がある中で、親の学びを支援することによって子どもの学びも高める、ということを展開していきたい。その成果がすぐに現れるものでもないと思うが、今までは恵まれない、厳しい家庭が置き去りになっていたのではないかと思う。藤井委員は、母親世代の働く場づくりや、セミナー、親子で参加できるイベント等に取り組んでいると思うが、子育て世代の学びについて、現状を含めて感じていることをお話しいただきたい。

委員 子育て世代に絞ろうとなったのは、親が学ぶ姿を見せれば子どもも学ぶだろうという長期的な視点があったと思う。困難な状況というのは一言では言えないので、ターゲットをどう細分化するのが大事だ。母子家庭に絞るとか。ただ、そういう家庭は、生活が苦しいため教育まで手が回らない。生活の支援がまず必要だ。親が学ぶなどの教育については、困難な状況にある子育て世代というのは少し難しいのではないかと思う。自分の周りにはいる母親世代も、集まりに自分で足を運んでこない人を外に出すには、少し異なる支援が必要になる。障害や、様々な困難を抱えていて、相談をしてくれる母親には支援の紹介ができるが、来られない家庭の母親には支援が難しい。

会長 幅広い意味での学び、つながり、ということになると、福祉の領域と近いものになり、福祉と教育の間のことは、難しいのではないかという御意見だと思う。例えば、インターネットを含めた学びは、公民館に行くよりも手軽な、親同士の繋がりをサポートする方法もあると思う。

委員 市政情報冊子やイベント情報の発信は市町村がしている。行こうと思えば場はある。そこに行けない人が、福祉の支援を求めていると思う。

委員 今は自由度が高まり、個人の自由が過ぎるのではないかと思う。

会長 家庭教育は、”私”の教育であるから、支援するのは難しいが、家庭教育支援、子育て支援も大切であるという方向にきていると思う。もう少し的を絞った方がよい、ただ、本当に厳しい家庭の学びに絞ると難しいという御意見か。

- 委員 支援というとな難しい。問題があるように見えても、親は、自分がいいと思ってやっている。学ばないといけない、というようにマインドイノベーションしないといけないと思う。
- 会長 親にも広い視野を持ってもらってもらいたいが、社会の成熟を考えた時に、それは親の問題だと思うのではなく、何か方策が考えられないか。
- 委員 大学生くらいになれば自分の行動に責任が持てるが、中学生はまだ子どもで責任が持てない。卒業式の後に派手な服装で騒ぐ中学生について、親も協力している場合もあり、違和感があった。
- 委員 世の風潮が変わり、自由度が広がっているように感じているが、世の中が良くなっていくのか疑問に思う。
- 会長 どこかで対象を絞る必要があると思う。これまで家庭教育支援は乳幼児期への支援が多かったが、今話を聞くと、小学校高学年から中学生の親への支援が少ないのではないか。PTA等が親同士の学びということで重視されることでもあるが、PTA活動も非常に難しくなっている。親同士の関わり合い、学び合いが弱くなってきているということは、そのとおりだと思うが、では、どのような支援が有効なのか、難しいが、何か取組ができたらいと思う。
- 井辻委員も、日々、親子に対する取組み、発達障害のある子のいる親子を巻き込んで様々な取組みをされているが、現状、どのような取組みが必要と思われるか。
- 委員 このテーマについて、集会に参加していた母親たちに話を聞いてみた。その際に共通して出た意見は、生涯学習・社会教育とは何か、というもの。学校教育は、知識の習得や受験勉強等、イメージしやすい。生涯学習と言われると、生涯勉強しろということか、との意見が出た。社会教育、生涯学習が、自分自身に関係することという認識がない。私が簡単に説明すると、つまり生き方のことかと理解してもらい話が進んだ。社会教育、生涯学習と言われると、忙しく、子どもがいるのに何かに参加したり学んだりするのは難しいと考えてしまうが、生き方のアドバイスや、生き方が楽になる方法等の情報は求めている。講演等は、よほどプラスになることがないと行こうとは思わないと言っていた。
- 今の親世代は子どもの頃のしつけが厳しくて、それがつらい経験で、自分の子どもにはしたくない、という思いがあるようだ。体罰や怒鳴る、ずっと我慢させるというようなことはせず、安心安全の場で子どもを育てたいという思いがある。しかし、そのように育てられてない、方法が分からない、というところ

ろから、自由すぎる子どもがうまれているのではないか、という話があった。安心安全の場というのは正解、不正解のない場ではないか。

中高生の居場所作りの活動をする時に、子どもたちにリサーチをすると、「何もしなくてもいい場所がほしい」という。実際に、私たちの活動の場では、こちらが何も言わなくても、勉強したい子はしているし、話がしたい子は話し、各自思い思いに過ごしている。このような場所を作るのは大変だが、子どもにとっても大切な安心安全の場なのだと感じており、親もそういう場を求めていると感じる。また、子育てサロンや健康診断等は、正解を求められていると感じてしまい、ストレスを感じ、行きにくいという意見があった。子育てについて役に立つ情報が得られるのは、インターネットと参観日等であるとのこと。学校の参観日は、本来は教室で親同士が会話をすることはできないが、廊下等で雑談をすることから、とても重要な情報を得ている。

事務局からの説明にあった、「悩みや不安は全くない」という回答をした親について話し合ったが、「悩みはない」のではなく、「悩みはあるけどそれどころではない、言ったところで変わらない」という意見があった。状況は様々であり、本当に絞って考えないと、ヒアリングでも本当に求めていることはみえてこないのではないか。

会長 生涯学習という言葉は、まだ誤解も多く、高齢者が趣味教養で学ぶものが生涯学習と思う人もいるし、子どもの学びと生涯学習は関係ないと思う人もいる。今の御意見を聞くと、行政的な形で、答えがあって、こうすべき、というような講座のようなものは、あまり好まれない、難しいのではということであったと思う。

委員 もう一つ、お正月の行事や盆踊り等、地域での決まった行事については、参加するものと思って参加し、子どもが自由に楽しく過ごし、初めは渋々参加した大人も、地域の人と触れ合って、豊かに有効に過ごしたりする。地域とのつながりを持ち、地域に出て行きたくなるようなものを作っていくのは、とても大切だ、という話もあった。

委員 若い母親世代が、「あまり関与してほしくない」とか「集まりの場には行きたくない」という意見もある中で、生き方についてのアドバイスを進んで受けるという姿勢は見られるのか。

委員 どのような言い方をされるかも重要で、上から言われると誰も聞きたくない。同じ悩みを共有できて、且つ、少し先輩の母親の話は聞きたいと思っている場合が多い。ただ、一方的に正解を押し付けられるのは嫌がる。忙しいし、共感もしてほしいと思うが、仕事や子育てでとても忙しい中で情報を集める場合

に、自分が間違っているとか正解を押し付けられると、なかなか受入れられない。また、そういう場がなかなかない。

会長 親が求めている研修は、P T A等が各学校で開催している教育講演会等や、スマホ等教育課題を絞って現代的な課題に焦点化し教えてくれるセミナー等なのか、それとも親同士が共感したり、生き方を考えたりするような、親に寄り添う学びの形か、どちらが求められているのか。

委員 両方だと思う。P T Aの会でも、親が企画するものは、役員の親の関心が強いものに内容が変わりやすく、教育改革、入試改革等の情報がほしい時はそのような内容になるし、みんなで話をして、性教育等、悩みを出し合う場がほしいという時もある。情報もほしいし、共感したいこともある。

会長 以前、学校やP T Aが学びの場を企画する時にその支援をするものもあった。そういうものがあれば、どのような内容の研修を開催する場合でも、活用できそうだが。

委員 P T Aで親が企画すると、その時の役員の力量や思考に左右されやすい。P T A活動の支援も意味があると思う。P T Aも小学校までは活発だが、中学校からはあまり役員に負担を掛けないように、学校が中心となって活動しているところもある。学校によって様々だ。

委員 県の施策として子育て世代を支援するプログラムも様々あるが、それらはどうか。

委員 参加しづらいという意見が多いように感じる。

会長 様々なプログラムがあるが、参加しづらい、ということであれば、どのようなものがあればいいのか提言するのもいい。状況が多様であるので、答えは一つではない。ただ、今の取組だけでは、親にとって十分ではないのではないかと、ということだと思う。

委員 社会教育の底上げは必要だと思うが、生き方を学ぶということにあまり意識がない。そういうものがすでに用意されていることに興味がある人は積極的に参加している。

会長 今後、人生100年時代と言われる時代になると、生き方自体が分からない、正解がない時代になってきているので、難しい面もあると思う。

- 委員 以前は、青年団等が社会教育の場であったが、大人になる過程で全員が社会教育に参加する時期というのが、今はほとんどない。
- 会長 青年団や地元の消防団等の地域の中で大人として成長していく場というのが、かつてはあったが、今はなくなってきたというのは事実だと思う。
- 委員 町内会などもそうだ。
- 会長 そのような中で、昔はよかったな、ということで終わるのではなく、現代社会ではどのような取組、支援があればいいのか、今の時代のニーズに合ったものでいいものはないか考えたい。
- 委員 P T Aの支援というのはいいと思う。学校教育にも興味を持ってもらえるし、家庭、社会すべてが関わること。自分が子どもの頃は、P T Aに参加している親はカッコよく見えていた。
- 委員 P T A役員になっていなくても、運動会等は参加するという人も多い。P T Aであれば同年代の子どもを持つ親の集まりであるので、何かできるのでは。学校だけでなく、地域、地区の企業も含めて、関わっていくとか。
- 会長 P T AにC、コミュニティーも含めて、あるいは民間も含めて、P T C A活動を展開している学校区もあるし、親父の会等で父親同士、父親と先生のつながりを作っているところもある。P T A活動の支援の在り方について、現状を見ながら再考するのも、研究テーマとしていいかもしれない。困難な家庭というのはターゲットとしては絞り込みやすいが、教育だけでは支援がなかなか難しい面もあるので、そもそもP T Aは親同士の学びの組織であり社会教育の団体であるが、学校を支援する組織だと捉えている親も多いと思うので、P T Aの役割やP T Aの支援について検討するのは社会教育としても重要なところだ。現役世代を子育て世代に絞ることは共有されていると思うが、親の学びの支援の在り方ということについて、P T Aは一つの大切な場だと思う。社会教育施設や社会教育団体とも連携しながら、P T A活動の活性化ということも意義がある。皆様の活動の中で、P T A活動を活発にしている事例等があるか。そういったところにヒアリングするのもいいと思う。
- 委員 ベルマークを集めている学校は多いが、何のためにやっているのかという意見もある。しかし、それは中々役割がないと外に出られない人のためにやっている、ということだった。そういう機会を作っている。

委員	<p>数年前の社会教育の大会での他県の発表にP T A活動の発表があったが、それが素晴らしかった。参考に資料を確認してほしい。保護者の方がしっかりと発表され、とても楽しんでいた。P T A活動は本来楽しいものであるが、現在は嫌々やる場合もある。自分達で主体的に企画し、楽しく取組めた方法を参考にしたらいいのではないか。</p>
事務局	<p>資料を確認する。</p>
会長	<p>P T A活動も非常に多様であり、都市部の大規模な学校の都市型のP T A活動と、地方の山間部の小規模校のP T A活動では違いがあり、課題も異なるので、それらの違いも踏まえながら、P T A活動の意味やP T A活動の活性化、それに対して行政としてどのような支援が必要か、ということも含めて提言をしていくことも重要だと思う。</p>
委員	<p>20年程前までは子どもの卒業式、入学式、P T A等に参加する親は少なかったが、ここ10年程は、例えば小学校の入学式に両親で出席するのがスタンダードになった。仕事をしている人でも、P T Aの役員のために月1程度で早く退社する人もいる。親がP T A活動に参加しやすくなっているのは確かだが、そういう状況は高まっていると思うので、そこでどのように研修等に参加しやすくしていくかということが大きいと思う。</p>
会長	<p>大学でも両親で入学式や卒業式に出席する人が増えてきた。教育に熱心な親が増えているのも事実である。今また課題になっていることとして、例えば授業参観日には参加するが、学級懇談会や全校での説明会等には参加せず帰る人が多いという。それは、自分の子どもの学びの様子さえ見られたら、他のことには関心がない、という場合があるようだ。子どもをより良く育てたい、子どもの学びのためなら何でもしたいが、クラスや学校全体で取り組み良くしていく、という話には関心がなく、自分の子さえ良ければいいという狭い子育て観を持っている人も増えてきているようだ。このような状況の中、P T A活動は親の学びの視点でもあるのではないか。そのあたりも含めて、P T A活動の県内の取組み等でヒアリングを行う等は、事務局としてどうか。</p>
事務局	<p>今後少し時間をいただき、まずはP T A活動の現状と、学校での親を対象とした研修の在り方に一工夫あるところ等を確認し、会長と相談しながら、候補を挙げてみる。また、そのヒアリングについても、訪問か招へいか等、スケジュールのように進めていきたい。ヒアリングについて、委員へ案内することも検討するので、御都合が付けば、参加していただきたい。その後、10月を目途にそれらの情報を報告したいと思う。</p>

会長 事務局の提案の「子育て世代」に絞っていくことは、共有できていると思う。親同士の学びは重要であり、親の学ぶ場や内容に関しては、非常に多様である。厳しい困難な家庭だけに絞るのは難しい。学校教育の中で多くの親が参加する、社会教育団体であるPTAの活動に着目しながら、親の学びを支援する、という方向がいいのでは、という話になったと思う。資料の7ページで言うと、③のみに絞るのは難しいので、①、②、特に②は、全ての子育て世代ができる学びの在り方を、PTA活動を中心に考え支援していく、という方向で検討を進めるのはどうか。事務局で、県内のPTA活動の状況や県外の先進的な取組事例等、情報収集し、提供してもらおうということによいか。

委員 「社会教育施設」については、一旦置くということによいか。団体のヒアリングについては、どのようにサンプリングするか。

会長 県外の事例は、来ていただくのは難しいと思うので、事務局で情報収集してもらい、県内の活発なところ等にヒアリング行くか、来てもらうかは、検討する必要があると思う。大規模校、小規模校の両方から調べてもらいたい。

委員 PTAの現状が把握できていないので、優良事例が把握できた段階で、その中で特に今重要ではないかと思われる点について、ヒアリングの前に焦点化した方がいいのでは。会議か、または委員へ情報提供するか、事務局からヒアリング先を選ぶ観点を示してもらおうとか、段階を踏んで進めてもらえると、効果的に議論を進め、提言へつなげられるのではと思う。

会長 ヒアリングの前に資料提供をするなど、事務局と相談、調整して進めていきたい。

委員 PTAの役員の決定方法や講演会・総会の参加率等、実態を把握するアンケートをとることは可能か。

会長 先行研究がある可能性もあるので、まとまったものがあれば活用したい。

委員 学力と活発なPTAとの関連があるのか知りたい。

会長 それはなかなか難しいかもしれない。

事務局 保護者の追跡調査の中で、PTA活動に参加している親の子どもの方が、学力が高いというものもある。

委員 P T A連合会の組織もあるが、教員の参加は少ない。全く参加していない保護者もいる。私としては、全員参加のP T A活動や、P T Aが学校を中心にしてどのように研修活動を進めていくか、そのような視点も必要だと思う。

会長 今日の意見を踏まえながら、事務局と検討していく。このようにして、我々も色々な立場から集まり議論しており、ここでの学びも良いことだと思っている。我々で議論しながら、岡山県の施策のために提言できたらいいと思う。社会教育、生涯学習は範囲が広いので、任期中に議論を進めるために、焦点を絞って進めていきたい。今回は親の学び、なおかつ、P T A活動に絞って、それに対する支援を考えていく、という方向で進めていきたい。

委員 「子育て世代」というのは、子どもがどの程度の年齢を考えるか。

委員 18歳の子ども、というくらいではないか。

委員 P T Aの役員や、学んでいる社会人が学校で授業をするという参加もあるのか。

会長 様々な職業の方が、子どもたちの学びを活性化するという取組も増えてきている。ただ、多くの場合、子どもと高齢者という関係になり、親世代が抜け落ちている、というのが社会教育の長年の課題になっている。そういったことも含めて、子育て世代、親世代に今回は焦点をあてていきたい。

○「3 その他（1）平成31年度の主な事業案について」

委員 子どもに読書を勧めるには、教室に本があることが大事だと思う。最も身近なところに子どもが読みたい本がある環境が大切だと思う。

事務局 できる限り子どもの身近なところに本があること、学級文庫が設置されること、子どもに人気のある本がそこにあること、学校にあること、効果的な購入計画や、市町村立の図書館との連携等の取組を進めたいと考えている。P T Aとの連携でも、数年前だが、吉備中央町立吉備高原小学校では、P T Aが読書ボランティアの形で本の運搬を手伝う等して、文科大臣表彰も受けている。

委員 新規事業ではないが、訪問型の家庭教育支援事業の中間報告等の資料を次回提供してもらいたい。家庭教育については社会教育委員の会議でも議論したが、なかなか難しいという話で終わった。困難な家庭への支援は継続して検討する必要があると思うので結果を提供してもらいたい。

委員 | 子育て支援についても、福祉との関係もあるが、現状が分かる資料を提供してほしい。

委員 | 公民館等を活用した夜間学び直し推進事業に関して、安易に夜間中学校を作ればいいというものではないと思っている。しかし少子化により学校数は減っており、学校が減ると地域活性化は難しい。ただ、こういったものに関しては課題も様々であり、学校教育法上の学校にしていくのか、公民館等を活用した学び直しの場をつくっていくのか、慎重に検討していただきたい。

○「3その他（2）第4 2回中国・四国地区社会教育研究大会岡山大会」について、事務局から説明

会長
閉会 | 特に無いようなので、これで協議を終結し進行を事務局に返します。